

二葉館内を進むと、1階の廊下突き当たりに、もうひとつの玄関があります。ここは、財界人や招待客をお迎えする表玄関とは違い、貞奴や桃介の身内、ごく親しい友人、そして使用人などが日常的に出入りするための内玄関でした。

昭和12年に土地や建物が売却された後、新しい所有者によって、建物全体に大きな改築が行われました。しかし、この内玄関は、和館部分の改築の際にもあまり手を加えられた様子がなく、創建当初の姿に近いまま残されていたと考えられます。中でも、沓脱くわだつ石や小縁、腰壁などは、創建当初のまま保存されていたものと推測され、二葉館の移築復元の際に再利用されました。



表玄関のような華やかさはなく、ひっそりとした佇まいの内玄関。しかし、よくご覧いただくと、床面と沓脱石は豆砂利の洗い出し技法が使われ、壁は色土に石灰などを混ぜて、素材感を出した京壁という塗り壁の手法で仕上げられているなど、日本建築の伝統技術が随所に散りばめられているのがわかります。

## 二葉館あれこれ Vol.10

### 内玄関

また、腰壁部分の板は栗の木を使い、これには細かく、なぐりなぐりの加工が施されています。なぐりとは、板の表面に道具の痕跡をあえて残しながら削る手法です。波型にできる削り跡や、それによる板の照りを楽しむもので、多くは栗の板が使用されました。主に数寄屋造りの建築にみられるものです。



腰壁部分

文化のみち二葉館は、関係各所への聞き取り調査や古写真、新聞・雑誌などの文献資料を基に復元されています。今回は創建当初の平面図を作成する際に参考にした資料についてご紹介します。

## IRODORI いろどり

文化のみち二葉館は、関係各所への聞き取り調査や古写真、新聞・雑誌などの文献資料を基に復元されています。今回は創建当初の平面図を作成する際に参考にした資料についてご紹介します。

### 川上邸新築家屋配置図

貞奴の菩提寺である貞照寺(岐阜県各務原市)に保管されている図面には、敷地全体とともに川上邸の平面外郭図(本宅)とそこから北側に廊下でつながれた新築家屋の平面図が描かれており、新築家屋の方には全体の寸法や本宅からの距離なども記されています。

図面の名称以外には「縮尺三分の一」の記述は少なく、作成年代や作成者についてはわかりません。しかし、前述の寸法を元に敷地面積を概算すると、貞奴が購入した敷地面積とほぼ一致します。さらに、本宅の平面外郭図を創建当初の玄関側正面の外観写真と比較すると、車寄せや半円形状の突出部分なども一致しました。このことから、この図面は本宅建設後の増築計画の際に描かれたもので、創建当初の川上邸の配置を正確に伝えるものと考えられます。

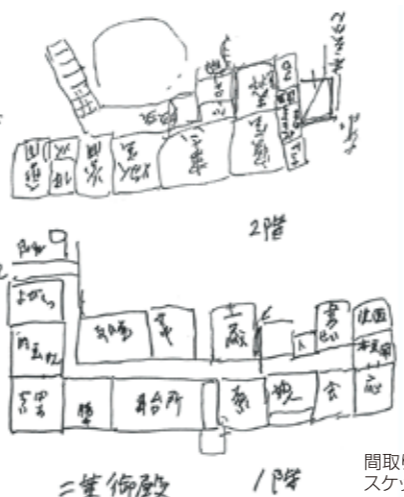
図面からは、当時の敷地は南北に少し長い長方形であったことや、本宅は敷地の中央西寄りに建てられていたことがわかります。また、玄関の前には正門から続く円形の車の方向転換用の通路があったことや、東南隅には車庫を兼ねた使用人の住まいと考えられる建物が建てられていたこともわかります。



川上邸新築家屋配置図(成田山貞照寺蔵)

加味して修正を繰り返して、創建当初の平面図が作成されました。復元にあたり、創建当初の様子が不明のため、昭和13年に行われた増築後の状態を元に復元された部分や、文化施設として活用するために変更された部分もあります。また、移築にあたって、現在の二葉館の敷地の大きさや形状から、建物の向きも時計回りに90度回転しています。

今回ご紹介した資料以外にも新築家屋に関する資料が保管されていましたが、聞き取り調査によると実際には建設されなかったようです。



### 間取りのスケッチ

貞奴の養女である川上富司氏が記憶を元に描いたものです。創建当初の間取りに関する資料は残されていないので、大変貴重な資料といえます。

このスケッチを元に、外観写真と致する間取りを作成し、不明な点などは富司氏と初氏(富司氏の娘・貞奴の孫)に聞き取りを行いました。さらに、前述の配置図や、解体調査で判明した番付(建物を組み立てるため、柱や梁などの部材につける符号)などを加味して修正を繰り返して、創建当初の平面図が作成されました。

## 文化のみち さんぽみち 10

### 開館10周年 「文化のみち 榎木館」

二葉館から西へ徒歩5分の所にある「文化のみち榎木館」が、令和元年7月17日に開館10周年を迎えました!

榎木館は、若くして陶磁器



庭園からみた洋館(右)と和館(左)

業家井元為三郎の旧住居です。現在のよう一般公開される以前は、市民が借り受け、喫茶店や事務所としても活用されていました。平成8年に名古屋市指定有形文化財に登録され、平成19年に名古屋市が取得、耐震補強工事を経て、平成21年開館に至りました。大正末期から昭和初期に建てられたこの建物は、平成20年に名古屋市の景観重要建造物に指定されています。

約六百坪の敷地には、洋館、和館、蔵二棟、茶室、庭園が配されています。「和館と洋館が、それぞれの様式で並置しているのが特徴です」と語るのは、NPO法人榎木倶楽部理事の伊藤喜雄さん。この建物が建てられた頃は、二葉館のように和洋折衷が流行でした。洋館の設計デザイナーは、当時の典型的なアメリカ住宅と同じだそうで、陶磁器バイヤーのゲストルームだった、ともいわれているようです。昨年リニューアルオープンした喫茶室「SHUMOKU CAFE」のテラス席では、洋館にいながらも純粋な和風建築と、四季折々の日本庭園の景色を味わうことができますよ。



喫茶室のスタンドグラス



春日井建の書棚

洋館の各所にあるスタンドグラスも、この建物の見所です。喫茶室には、アメリカンテールテコの意匠に鳥たちが施され、淡い色彩のスタンドグラスが館内を優しい光で包みます。文化のみちエリアに存在する他のスタンドグラスと見比べてみてはいかがでしょうか。最後に坂口館長より、「今後も楽しいイベントなどを開催していきますので、より多くの地域の皆さまのご来館をお待ちしています」とのお言葉を頂きました。新しい元号とともに10周年の節目を迎えた榎木館に、是非お立ち寄りください!

文化のみち榎木館  
【所在地】名古屋市中区  
榎木町2丁目18番  
【電話】052-939-2060  
【入館料】2000円、二葉館との共通券3200円  
(一般)

## from Archive 書庫棟から

### 郷土ゆかりの 近現代文学史略年表



略年表

その昔、名古屋の中区には「大惣」という大きな貸本屋がありました。少年時代の坪内逍遙が通ったことでも知られています。栄で暮らしたことに探偵小説家として活躍する江戸川乱歩も、中学の頃に貸本屋をよく利用していた、と書き残しています。

二葉館の螺旋階段を上ると、正面に大きなパネル「郷土ゆかりの近現代文学史略年表」が掛っています。日本の近現代文学の礎を築いた坪内逍遙、二葉亭四迷が、現在の愛知県立旭丘高校で学んだことに始まり、明治・大正・昭和・平成の時代に文学的功績を残した、百人以上の郷土ゆかりの作家について書かれています。

この略年表ですが、郷土の文学研究会や関係協力者監修のもと、平成最後の年に約十年ぶりに刷新しました。紙面のスペースに限りがあるため、これまでの内容を見直し、新しい年代を加えるなどして、編集には多くの時間と労力を要しました。

完成した略年表を眺めてみると、たくさんのお客様からは、「あつ、この作家知ってる!名古屋出身だったんだあ!」この作品読んだことある!などの、驚きや発見の声が聞こえてきます。



二葉館周辺(長屋門)

これからも、魅力ある郷土文学を皆様にご紹介して参りますので、楽しみにしててください。

また大正時代、この二葉館周辺には詩人の春山行夫、井口蕉花、佐藤一英らが住んでおり、伝説的なモダン詩誌「青騎士」が生まれました。そして戦後から現代に至るまで、芥川賞や直木賞を受賞する作家や、優れた歌人なども数多く輩出しています。昔からこの地域は、文学的土壌に恵まれているのかもしれない。

当館では、これまでに郷土ゆかりの作家や作品を採り上げて企画展を開催してきました。今秋は、先にあげた「青騎士」など大正から昭和初期におけるモダン詩についての展示を行います。